1960年代における「根性」の変容に関する一考察： 東京オリンピックが果たした役割に着目して

岡部 祐介¹⁾ 友添 秀則²⁾ 春日 芳美³⁾

Yusuke Okabe¹, Hidenori Tomozoe² and Yoshimi Kasuga³: The transformation of *konjo* in the 1960s, focusing on the role to The Tokyo Olympic Games. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 57: 129-142, June, 2012

Abstract : *Konjo* is the willpower necessary to endure suffering, and for making an effort, having become a word in daily use in society, as well as in sports. The purpose of this study was to clarify the opportunity and the factors responsible for the transformation of *konjo* in Japanese society in the 1960s. Our study focused on three points: 1) Clarifying how the meaning of the word *konjo* changed in the 1960s, from its dictionary definition and usage in newspaper articles. 2) Clarifying the situation in which *konjo* became popular through the Tokyo Olympic Games, and its spread to the sports community and to society. 3) Considering the factors responsible for the transformation of *konjo*, and to propose a hypothesis that could account for it.

Our conclusions were as follows: 1) The meaning of *konjo* evolved from a negative context of “a fundamental character and mindset with which a person is born” to a positive context of “a strong, resilient character that cannot be suppressed” and “a strong motivation to accomplish an aim” at the beginning of the 1960s. 2) *Konjo* was considered to the spiritual keynote for athletes at the Tokyo Olympic Games. Hirobumi Daimatsu’s “*konjo* theory” had the persuasive reason by winning “Oriental Witches” championship at the Tokyo Olympics. In view of these factors, we considered that *konjo* was interpreted as a popularized moral virtue by society, and impacted on both education and popular culture. 3) We considered that the concept of *konjo* became transformed and was used to promote competitiveness in sports at the Tokyo Olympics as part of the strategy for “character building”. It also played a role in bolstering human resources that played a key role in economic development during the 1960s, and thus was of strategic value. The considerations listed above show that the Tokyo Olympic Games played an important role in the transformation of the concept of *konjo* in the 1960s.

Key words : high-speed economic growth, sport, spiritualism, hirobumi daimatsu, character building
キーワード：高度経済成長，スポーツ，精神主義，大松博文，人間形成

I. はじめに

1. 本研究の目的

「根性」とは、苦しみに耐え抜いて努力する精神力のことをさし、現在ではスポーツをはじめ日常的に使用されている言葉であるといえる。一方

で、わが国では「根性」という言葉によって示される精神性が、これまでスポーツに対する見方・考え方の特質として取り上げられてきた。スポーツにおける「根性」は、「精神主義」「修養主義」（岸野，1968，菅原，1976）や「苦しみのスポーツ価値意識」（上杉，1982），「苦行的スポーツ」（デビットノッター・竹内，2001）といった表現

1) 早稲田大学スポーツ科学研究センター
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
2) 早稲田大学スポーツ科学学術院
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
3) 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
連絡先 岡部祐介

1. Waseda Institute for Sport Sciences
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192
2. Faculty of Sport Sciences, Waseda University
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192
3. Graduate School of Sport Science, Waseda University
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192
Corresponding author y.okabe@kurenai.waseda.jp

で示される性質と類似するものとして考えることができ、いわゆる「日本的スポーツ」論^{注1)}の範疇に位置づけられるといえる。

しかし、この「根性」という言葉に着目し、意味使用の変遷に着目した研究や、スポーツにおける「根性」を取り上げ、その変容過程に着目した研究は、管見では僅少であるといえる。学術的な研究では、たとえば松田（1971）や中込（1984）をはじめとしたスポーツ心理学の立場から、「根性」のメカニズムとその養成方法について考察した研究成果が確認できる。また、山岸ほか（1979）は、社会心理学の立場から、高度成長期の社会心理として「根性主義」を指摘しており、歴史的な分析と構造的な特質について考察をおこなっている。坂上（2001）は、「根性」が1964（昭和39）年の東京オリンピックを重要な契機として流行し、高度経済成長を支えた日本人の精神的支柱として定着していったという見解を述べている。しかし、これらの研究では、1960年代における「根性」の意味使用の変容およびその要因や、スポーツにおける「根性」の成立および定着状況についての重点的かつ実証的な分析は十分でないと考えられる。

そこで本研究では、山岸らの用いた「根性主義」や日常的に使用されている「根性」とは差異化された、スポーツにおける「根性」の特質をどのように示すことができるのかということを念頭に置き、わが国の1960年代における「根性」の意味使用が変容した契機を明らかにすることを目的とする。とりわけ、東京オリンピックを契機としてスポーツ界において「根性」が取り上げられた経緯をふまえ、「根性」の意味使用の変容にスポーツおよび東京オリンピックが重要な役割を果たしたことを明らかにしたい。そのために、本研究では次の課題を設定し、考察を行なうこととする。すなわち、1) 1960年代に「根性」という言葉の意味使用が変化したことを辞書の定義や新聞記事における使用状況の変遷から明確化し、2) 東京オリンピックを契機に「根性」が取り上げられ、スポーツ界および社会に普及していった状況を明確化する。1)、2)の考察をふまえ、3) 1960年代

における「根性」の意味使用が変容した要因を仮説的に提示することとする。

2. 1960年代の精神的背景と東京オリンピック

上述のように設定した課題について考察を進めていく前提として、本研究において焦点化する1960年代という時代の精神性、社会通念について概観し、「根性」の意味使用の変容および東京オリンピックという事象との関係を示しておく。

本研究における考察の中心的な対象時期となる1960年代は、戦後のわが国における高度経済成長が明確な足取りのものとなり、大衆（消費）社会とよばれる状況が特徴的に示される時期であるといえる。この時期には、経済状況は戦前の水準をこえ、めざましい復興を遂げたといえよう。しかし、精神状況についていえば、1945（昭和20）年の敗戦時からは回復していないことが指摘されている（竹内、1959, pp. 1-6）^{注2)}。見田（1965）は、1960年代の精神状況に着目するうえでは、1945（昭和20）年の敗戦による挫折・喪失に新たな地点からたえず立ち返ること、その意味を繰り返し深めていくことが肝要であると述べている（見田、1965, pp. 140-141）。「根性」の意味使用の変容と東京オリンピックをめぐる精神状況については、上述のように敗戦による挫折・喪失体験を関連づけることができる。

五十嵐（2007）によれば、敗戦による挫折・喪失の記憶^{注3)}は、戦後日本の文化的なアイデンティティの構築にとって根本的なものとして存在してきたと考えられている。五十嵐は、東京オリンピックによって喪失の記憶は次のように変容していったと述べている。

「オリンピックという華々しいスポーツの祭典は、戦後の日本社会にとって、スポーツ選手の身体と都市景観を通じて、戦争の記憶を再編し、衛生的で無害なものにする機会となったのである。（中略）戦争の記憶は依然として戦後社会とともにあったのだが、それは日本の戦後の繁栄のための必要条件へと、言

説のなかで変容されていったのである」(五十嵐, 2007, p. 25)

上述の五十嵐の見解をふまえていえば, 東京オリンピックは, 戦争における挫折・喪失を想起させたと同時に, 高度経済成長下の1960年代における再建・復興の象徴として位置づけることができよう。戦後のわが国における国際復帰, 高度経済成長の達成といった再建・復興を支えた精神は, 上述のように戦争による挫折・喪失体験とのかかわりによってみいだされる。

山岸ほか(1979)は, 東京オリンピックを契機として1970年初頭まで続いた「根性」という言葉の流行に着目し, 背景にある当時の社会心理を「根性主義」として分析の対象とし, 安丸(1974)の民衆思想研究で用いられた「通俗道徳」^{註4)}との比較において, 「根性主義」を「通俗道徳の現代版」としてとらえる可能性を示している。「通俗道徳」は, 本質的に「建設の倫理」ではなく, 中井(1982)が述べた危機からの「復興・再建の倫理」または「執着(性)気質的職業倫理」^{註5)}であったと考えられる。このような背景・性格のもとで捉えられる「通俗道徳」はまた, 歴史的・階級的に貫通したものであるとも考えられていることから, 「根性主義」が「通俗道徳の現代版」として捉えられたといえよう。

しかし, 山岸らが反省的に述べているように, 近世後期においてみいだされた「通俗道徳」と高度経済成長期における「根性主義」との類似を指摘するには, 関連する諸言説のより厳密な分析と考察が必要であるといえる。本研究においては, 「通俗道徳」や「執着気質的職業倫理」が, 「根性」の意味使用の変容および流行を支えた精神状況にも確認されうるものであると仮説的に捉えておくこととする。すなわち, 「根性」の意味使用が変容していく背景には, 「通俗道徳」や「執着気質的職業倫理」と関連する挫折・喪失の危機からの「再建・復興」の時代精神・社会通念が認められるのではないかと考える。このような背景状況をふまえ, 以下では「根性」の意味使用の変容およびその要因について考察していくこととする。

Ⅱ. 「根性」の辞書的意味およびその使用状況の変遷

ここでは, 「根性」という言葉の意味に着目し, 「根性」の意味形成およびその変遷について検討する。つまり, 冒頭で示した1) 1960年代に「根性」という言葉の意味使用が変化したことを辞書の定義や新聞記事における使用状況の変遷から明確化するという課題に取り組んでいく。

はじめに, 「根性」の意味が国語辞典^{註6)}においてどのように説明されてきたのかということについて検討する。明治時代の初期の代表的な国語辞典である「言海」(1891, 明治24年)には, すでに「根性」の記載が確認できる。その内容は, 「ココロ, ココロネ, ココロノソコ」と記されている。同時期の「日本大辞林」(1894, 明治27年)も同様の内容が記載されている。また, 1928(昭和3)年の「大日本国語辞典」も同様の内容を示しており, 例示には「根性ヲ入レ換ヘル」と記されている。「言海」の改訂版として出版された「大言海」(1933, 昭和8年)においても, 「ココロネ, ココロダテ, 性根」といった同様の内容が記載されている。そこでは「根」と「性」とをそれぞれ参照との注記があり, 「根」の項では, 「佛經ノ語, 人ノ天賦ノ性質, 性能, 根性. 事ヲ行フニ, 久シク堪ヘ忍ブ, 精神ノ力. 精力・気力」, 「性」の項では, 「人ノウマレツキノ性質・性分」という記載がある。その後, 1934(昭和9)年の「広辞林」, 1935(昭和10)年の「辞苑」, 1938(昭和13)年「言苑」, 戦後は1959(昭和34)年の「新言海」にいたるまで記載内容の変化はなかった。また, 用語の例示からは, 「根性腐り」や「根性悪」, 「根性を入れ換える」などの語が確認され, 「根性」という言葉は必ずしも肯定的な用語を伴って使用されていなかったことが考えられる。

現在の「根性」の意味を辞書にもとめると, 2008(平成20)年の広辞苑第6版では「その人の根本的な性質. ころね. しょうね」, 「困難にもくじけない強い性質」という2つの意味の記載が確認できる。広辞苑において後者の意味が記載

されたのは1983(昭和58)年第3版からであった。また、1974(昭和49)年の日本国語大辞典では、「苦しみや困難に耐え、事を成し遂げようとする強い気力、根気」という意味内容が加えられた^{注7)}。

上述のことから、「根性」は戦前から戦後のはじめにかけて、ひとつには「こころだて、こころね、しょうね」といった、人間性や人間の本質的な部分、先天的に備わった性質といった意味の言葉として使用されていたことが考えられる。いまひとつは、1933(昭和8)年の「大言海」の「根」の項にみられたように、「事を行なうに、久しく耐え忍ぶ精神の力」という意味が付与されていたことが考えられる。しかし、「大言海」の後の「辞苑」や「言苑」では、「根性」の項で「事を行なうに、久しく耐え忍ぶ精神の力」という記載は確認されていないことから、「根性」は一般的に前者の意味で使用されていたことが推察される。そして、「困難にくじけない強い性質」、「事を成し遂げようとする強い気力」といった意味で一般的に用いられるようになるのは、1970年代前後のことであると考えられる。このような「根性」の辞書的な意味の変遷をふまえ、以下では新聞記事^{注8)}を中心として「根性」という言葉の使用状況に着目する。

表1、2は、朝日・読売両紙における「根性」という言葉の記載件数および意味使用の分類を示している。意味使用の分類については、上述の国語辞典における記載内容をふまえ、次のように行なった。意味Aについては、「こころだて、こころね、しょうね」といった、人間性や人間の本質的な部分、先天的に備わった性質といった意味で、主に否定的な用語や文脈を伴って用いられている「根性」を、意味Bについては、「困難にもくじけない強い性質」、「事を成し遂げようとする強い気力」といった意味で、主に肯定的な文脈で用いられている「根性」を示している。

表によれば、両紙ともに創刊年から「根性」の記載が確認できる。しかし、戦前の記載件数に比べて、戦後の1960年代からの記載件数に急激な増加がみられる。意味使用については、両紙とも

表1 朝日新聞における「根性」の使用状況

年	記事件数	意味A	意味B	その他
1879(明治12)年—1890(明治23)年	3	3	0	0
1891(明治24)年—1911(明治44)年	63	62	0	1
1912(大正元)年—1925(大正14)年	50	50	0	0
1926(昭和元)年—1945(昭和20)年	42	41	0	1
1946(昭和21)年—1959(昭和34)年	18	18	0	0
1960(昭和35)年	4	1	3	0
1961(昭和36)年	2	0	2	0
1962(昭和37)年	1	0	1	0
1963(昭和38)年	13	3	9	1
1964(昭和39)年	18	1	17	0
1965(昭和40)年	12	2	9	1
1966(昭和41)年	10	4	6	0
1967(昭和42)年	13	0	13	0
1968(昭和43)年	11	1	10	0
1969(昭和44)年	6	1	5	0
1970(昭和45)年	11	0	11	0
1971(昭和46)年	16	1	15	0
1972(昭和47)年	5	1	4	0
1973(昭和48)年	5	0	5	0
1974(昭和49)年	9	0	9	0
1975(昭和50)年	7	0	7	0
1976(昭和51)年	9	0	9	0
1977(昭和52)年	4	2	2	0
1978(昭和53)年	2	1	1	0
1979(昭和54)年	6	0	6	0
1980(昭和55)年	5	0	5	0
計	345	192	149	4

に戦前における意味Bの使用は確認されなかった。

記事の内容をみていくと、戦前では朝日新聞の創刊年である1879(明治12)年の大阪版朝刊の記事において、すでに「慾張根性」という使用が確

表2 読売新聞における「根性」の使用状況

年	記事件数	意味 A	意味 B	その他
1875(明治8)年— 1890(明治23)年	21	15	0	6
1891(明治24)年— 1911(明治44)年	32	31	0	1
1912(大正元)年— 1925(大正14)年	22	21	0	1
1926(昭和元)年— 1945(昭和20)年	49	40	0	9
1946(昭和21)年— 1959(昭和34)年	65	46	0	19
1960(昭和35)年	5	2	0	3
1961(昭和36)年	9	2	6	1
1962(昭和37)年	7	4	3	0
1963(昭和38)年	28	9	19	0
1964(昭和39)年	42	12	24	6
1965(昭和40)年	47	10	32	5
1966(昭和41)年	16	5	9	2
1967(昭和42)年	30	8	18	4
1968(昭和43)年	35	14	19	2
1969(昭和44)年	24	4	17	3
1970(昭和45)年	60	19	38	3
1971(昭和46)年	15	2	13	0
1972(昭和47)年	19	7	12	0
1973(昭和48)年	11	1	10	0
1974(昭和49)年	12	3	8	1
1975(昭和50)年	6	0	6	0
1976(昭和51)年	8	1	7	0
1977(昭和52)年	9	1	8	0
1978(昭和53)年	14	2	12	0
1979(昭和54)年	14	2	12	0
1980(昭和55)年	8	1	7	0
計	608	262	280	66

認できる。また、読売新聞に関しても、1875(明治8)年の記事に「奴隷根性」という語が確認できる。ほかにも「士族根性」(朝日新聞1893年9月8日付)や「町人根性」(1894年2月11日付)という使用が確認できるが、記事ではこれらが否

定的に取り上げられている。1910(明治43)年の朝日新聞では、気質と「根性」について解説した記事を確認することができ、「根性と云ふのは気質よりは狭い悪い意味を有つので商人根性と云へば馬鹿に金を儲けたがり義理人情を知らぬ共通習慣を云ひ百姓根性と云へば握つたら最後鏝一文でも出さないシミツたれな共通習慣を云ふ」(朝日新聞1910年4月19日付)と述べられている。その他に戦前の記事における使用例をみると、窃盗を犯して刑を受けた者が出所後間もなく再び窃盗を働いたことに「持つて生れた根性」(朝日新聞1915年1月24日付、同年10月12日付)と評した記事や、「他人に少しでも儲けさせまいとして小細工を弄する役人根性」(読売新聞1928年6月16日付)といった記事が確認できる。その後、戦前から戦後の1950年代まで記事における使用の変化は確認されず、主に「島国根性」や「役人根性」、「ナワバリ根性」といった語が用いられていた。これらの記事をはじめとして、明治期から戦後初期における「根性」は、人間の根本的な性質や気質といった辞書の意味で使用されていたといえよう。そして、「奴隷根性」や「鬼畜根性」、「泥棒根性」などといったように、「根性」は否定的な用語とともに用いられていた。国語辞典における使用例では否定的な用語が記載されていたが、新聞記事においても同様の使用がなされていたといえよう。

しかし、戦後になると、国語辞典におけるもう一方の意味である「困難にくじけない強い精神」という使用や肯定的な文脈における使用が確認できるようになった。特に、スポーツに関連した記事において、競技者を称賛するような文脈における使用がなされている。たとえば、朝日新聞では1960(昭和35)年に相撲関連の記事において「根性の人・栃錦」という見出しを掲げており(朝日新聞1960年5月11日付)、同年の11月に掲載された野球関連の記事では、勝利投手が「まさに根性の男」という見出しで称賛されている(朝日新聞1960年11月13日付)。読売新聞においても、「プロ・テニスの根性」(読売新聞1961年11月10日付)という見出しの記事が確認でき、当時の各スポー

ツの記事において、「根性と名門の底力」（読売新聞1961年10月16日付）、「ムーアの根性/世界フェザー級選手権」（読売新聞1961年11月14日付）といたように「根性」が用いられている。また、1961(昭和36)年には、「根性」という言葉そのものを取り上げた記事が確認できる。そこでは、「根性」は昔から使用されてきた言葉であるとしながらも、「兵隊の訓練や戦争を背景にして『根性』をうんぬんすると、いい気持がしないが、スポーツの場では、この言葉は生気をとりもどす」（朝日新聞1961年11月1日付）と記されている。

上述のように、新聞記事における使用状況から、「人間の根本的な性質」を本来の意味としていた「根性」は、1960年代にはその意味使用が変化していることが確認できる。さらに記事をおっていくと、東京オリンピックが開催された1964(昭和39)年以降は、「根性」がスポーツを中心として流行語的にさまざまな場面で用いられていくことがわかる。

東京オリンピックが開催された1964(昭和39)年10月には、競技結果を伝える記事に「根性」が使用されている。たとえば「見事、養った根性 レスリング ローマの雪辱」（朝日新聞1964年10月15日付）や「超人的なアベベの独走 円谷も根性みせる “ベルリン以来” の快挙」（朝日新聞1964年10月22日付）、「猪熊功 根性のカムバック」（読売新聞1964年10月23日付）といった見出しにあらわれているように、競技者の強靱な精神をさす言葉として「根性」が用いられている。

東京オリンピック後の朝日新聞社説には、以下のようにスポーツにおける「根性」に関連する記載が確認できる。

「体格も適性も技術も闘志も運動神経反射も十分な選手が、自在にエネルギーの持続と配分を掌中のものとしていることと、“根性”を解析した人があったが、ここまでくると“根性”の中に精神的、心理的、肉体的条件の総合強化の意味が込められていることになり、この各条件を良くし要素を鍛えることがトレーニングであることがわかる」（朝日新

聞1964年10月22日付）

上述の記事から、「根性」は競技者の総合的な強化・育成の基調とされていたことが推察される。

東京オリンピックを前後して、社会的な側面においても「根性」が取り上げられている。読売新聞では、「現代の日本人」という特集において、当時の社会問題として向上意欲の低下や目標の不在をあげ、現代機械文明の社会では根性を発揮しにくい、いわば「根性」が不要の時代であると記されている（読売新聞1964年8月10日付）。この記事において、「根性」は「目標を達成する強い意欲」であり、「たゆまぬ努力、忍耐、ねばり…などを伴うもの」とであると規定されている。そして、「根性」はもって生まれた性質というよりも、社会的環境など後天的にそなわる要素が強いと記されており、「根性」を「仕事への欲ばり、あるいは欲づくり」ととらえ、「根性」は「社会の期待にこたえ、社会の目標を自己の目標とする態度をつくりあげ、さらに社会的価値を生産するという終局目標」と考えられている（朝日新聞1964年6月6日付）。1964(昭和39)年以降は、「テスト主義やめて根性の教育」（読売新聞1965年2月1日付）や「根性づくりに養豚」（朝日新聞1965年10月22日付）、「合宿で社員に根性」（朝日新聞1966年8月5日付）などと報じられているように、スポーツ界に限らず、各方面で「根性づくり」や「根性教育」が取り上げられている。

上述のような新聞記事における使用状況から、「根性」の意味使用は、それまで主流であった「生まれついた人間の根本的な性質」という意味で、主に否定的な文脈における使用から、「困難にもくじけない強い性質」、「事を成し遂げようとする強い気力」といった意味を中心とした使用に転換していったと考えられる。また、この意味使用の転換は前項で検討した「根性」の辞書の意味が変容した時期（1970年代初期）にも概ね対応しているといえよう^{注9）}。本項における以上の考察から、1960年代において「根性」は、先天的に備わった性質から後天的に形成される可能性が込められた用語へ、また、否定的な用語を伴った

使用から肯定的な用語を伴った使用へと変容していったことが実証的に明確化されたといえよう。また、「根性」の意味使用の転換は、東京オリンピックを中心としたスポーツ界に端を発していることが推察された。

Ⅲ. 「根性」の各方面への普及・定着

これまでの考察をふまえ、以下では当時のスポーツ状況に着目し、特に東京オリンピック開催にともなうスポーツ体制の成立過程において、「根性」がどのように取り上げられていったのかを検討していく。つまり、本研究における課題2)東京オリンピックを契機に「根性」が取り上げられ、スポーツ界および社会に普及していった状況を明確化することを試みる。

1. 東京オリンピックにおける精神的基調と「根性」

1961(昭和36)年に組織された東京オリンピック選手強化対策本部(以下「選手強化本部」と表記する)では、メダルを獲得するための選手強化の具体的な方針として、「根性づくり」が考えられた。選手強化本部スポーツ科学研究委員会心理部会^{注10)}は、「根性」を、「高い目標意識をもち、その目標達成のために精神を集中しそれを持続する強烈な勝利への意志」(東京オリンピック選手強化対策本部, 1962, p. 2)と定義している。

東京オリンピックに向けた選手の「根性づくり」はスポーツ科学研究委員会の心理部会で取り扱われていた(スポーツ科学研究委員会, 1965, p. 22)。心理部会では、発足当初から競技者の「あがり」の研究や、指導者が競技者の性格を科学的に把握し、合理的な指導を行なうための性格テストの方法に関する研究に取り組んでいたが、「あがり」や競技者の性格特性の問題を、競技者の精神面の強化、すなわち「根性」養成の問題に関連づけた。

スポーツ科学研究委員会の報告書によると、この問題は競技者にとどまらず指導者のあり方や指導方法にも関連することであり、競技者や指導者

の基本的な構えや態度の問題と、競技者の可能性を最大限に引き出す心理的な基盤の問題として究明された(スポーツ科学研究委員会, 1965, p. 495)。報告書では、心理部会で検討された「根性の意義」「根性のある選手」「根性養成の方法」についてそれぞれ規定されている。「根性の意義」においては、「運動選手としては、スポーツの価値を認め、記録を伸ばすことの意義を認識し、明確な目標をもって、自己の行動を統一し、選手としてあるべき自覚をもち、選手として、社会から期待されている行動をとれるようにすることが、“根性をつける”ことであると考えられる」(スポーツ科学研究委員会, 1965, p. 495)という記載がある。そして「根性のある選手」に共通する特徴については、勝利というひとつの目標のために練習に打ち込み、苦しさに耐え、努力を怠らないことが指摘されている。

選手強化本部の機関誌「OLYMPIA」には、役員や指導者で構成された座談会の内容が掲載されている。座談会では各氏による「根性」論が語られており、勝利への自信をつけるために「猛練習」することが重要な要素であると説かれていた(東京オリンピック選手強化対策本部, 1962, pp. 2-10)。たとえば、当時の水泳連盟会長を務めた高石勝男は「根性とは自信である」と述べており、陸上競技の強化コーチを務めた田島直人は「根性とか精神力とかいうものは、実力と裏腹なものなんだと思う。自分の現在の体力では、これ以上出せそうもないということまで練習したという自信である」と述べている。また、当時スポーツ科学研究委員会委員長の東俊郎は「もともと根性とは、自信をもつまでの練習をやり続けるための節制、勇猛心こんなものが混然となってあらわれるものである」と述べている。このように、「根性」の養成には徹底的な猛練習が欠かせない要素とされた。座談会では、猛練習によって「根性」をもたせるために大切なものはエリートとしての自覚であるとし、選手たちは選ばれた人間であり、日本の選手の代表で外国の選手と戦うのだという自覚と責任感、誇りがなければならないといわれた。

スポーツ科学研究委員会心理部会の一員であっ

た太田（1968）は、1964（昭和39）年の東京オリンピックに備えた選手強化の過程において、「根性養成法のテキストの作成」についての要請があったことにふれ、その経緯を述べている。太田によれば、東京オリンピック選手強化対策本部長を務めた大島鎌吉が、スポーツ科学研究委員会心理部会に上述のテキスト作成を要請したといわれ、心理部会の委員たちによって資料が作成されたという（太田，1968，p. 44）。大島が選手強化に根性を持ち込んだ理由については、当時の紙面において以下のように述べられている。

「試合で選手の能力をフルに発揮させるのは結局のところは、強い意志の力による。精神力だ。そのことは経験的にはわかっていたが、それをどうやって、選手たちに理解させるかが問題だった。それには、感情にうったえるのが早道だ。根性という言葉がぴったりだと思った」（読売新聞1965年3月3日付）

太田によれば、当時は体力づくりが重視され、一応の体力が形成された後に魂を注入するという意味から「根性」という言葉が使用されはじめたという。また、生理学的見地から理論づけられた体力づくりを、機械のような運動としてではなく、バランスのとれた人間形成の一環として考えさせるねらいもあったという（太田，1968，p. 45）。人間形成の一環としての「根性づくり」という考えについては、大島も雑誌の対談において、同様のことを述べている。

「日本人の持っているポテンシャルを開発してみようじゃないかという気があった。そのためにはトレーニングのやり方とかいろいろ問題があるが、私たちは“人間づくり”というコトバを使った。別の人間をつくるのだ。いままでの日本人のスポーツ界にはいなかった別の、もっと次元の高い人間をつくらうじゃないか、というので、“人間づくり”だった」（大島，1964，p. 65）

大島が東京オリンピックにおける選手強化を「人間づくり」としたことには、スポーツにおける日本人の持っている可能性を追求したいという野心や期待がその根底にあったと考えられる。つまり、東京オリンピックにおける競技者の精神的基調としてあげられた「根性」は、スポーツにおける競技者としての「人間づくり」や「人間形成」の問題として取り上げられたのであり、選手強化における「根性」は、競技者の人間的価値についての評価を左右するほどの影響力をもっていたと考えられる。また、スポーツ科学研究委員会によって規定された「根性」とは、勝利という目標達成のために精神を集中し、困難に屈せず継続する強固な意志のことであり、その養成には、ハードトレーニングといわれる猛練習が重視されたといえよう。

以上のことから、「根性」の意味使用が変容していく背景には、東京オリンピックを成功に導くための、スポーツ界の積極的なはたらきかけが関連していたことが考えられる。すなわち、戦後のスポーツ体制とりわけ東京オリンピック体制が整備されていた過程において、「根性」は担い手の精神的基調として戦略的に指定されたといえよう。

2. 東京オリンピックを中心としたスポーツにおける「根性」論の展開

次に、「根性」が体育・スポーツの各方面で取り上げられ、いわゆる「スポーツ根性論」が流行していく状況について検討する。

東京オリンピックを重要な契機として形成されたと考えられる、意味使用が変化した「根性」は、競技スポーツおよび一流競技者のみならず、一般大衆が主体となるスポーツや学校体育、運動部活動にも浸透していったことが考えられる。東京オリンピック後の体育雑誌をみると、『新体育』においてスポーツと「根性」についての論稿が掲載されており、「根性」は競技者のみに必要とされるものではなく、社会において困難な状況でも強い意志と実行力で生き抜く力として求められるものであると考えられている（高橋，1964，p.

130)．このとき、「根性」は「道徳的な心の強さ」(高橋, 1964, p. 131)に読み替えられているといえる．また、『学校体育』でも1965(昭和40)年の新年号で「根性」についての論稿を掲載しているほか, 1968(昭和43)年には「体育における精神的側面」という特集を組み, 「根性」を取り上げている．これらの論稿では, 「根性」は「精神力」とほぼ並列してとらえられ, 「これを心的機能としてとらえ, 練習や試合に対する激しい闘志などの一面と自己の意志, 感情を統制して運動に対して有効に集中したり, コントロールする作用の一面とを統合した概念」(浅川, 1968, p. 22)と考えられている．

丹下(1963)は, ハードトレーニングを自ら進んでやり抜く「根性」のある競技者をスポーツの人間ととらえ, オリンピック代表候補選手たちの雰囲気, そのまま社会的な雰囲気となり, トップレベルの競技スポーツに限らず, 小学校から大学まで学校スポーツにも及んでいると主張している(丹下, 1963, pp. 152-154)．このような人間づくりは, 自然に形成されるものではなく, 「主として運動クラブ指導教官, 先輩, 部員たちによって絶えず強力に行われる指導によって形成される」(丹下, 1963, p. 152)ものであると述べている．スポーツにおける「根性」は, オリンピックや世界大会の選手となる一流競技者に限らず, 学校スポーツ, 特に運動部活動における指導にも反映されていったといえよう．

スポーツにおける「根性づくり」は, 東京オリンピックにおいて競技者の養成および強化のために, 選手強化本部, スポーツ科学研究委員会が中心となって考えられた経緯があった．その一方で, オリンピック選手を指導した指導者たちが独自の根性論を展開し, 東京オリンピック以降の根性の流行を後押ししたことが考えられる．スポーツ指導に「根性」を取り入れた指導者には, 日紡貝塚女子バレーボールチーム「東洋の魔女」を率いた大松博文があげられる．大松の著書「おれについてこい!」は, 1963(昭和38)年に出版後ベストセラーを記録していることから, 当時の人びとに広く知られていたといえよう．大松の独特な指

導論については, 作田(1967)が以下のように簡潔に言いあらわしている．

『なせばなる』『勝負は勝たねばならぬ』『自分のためにやれ』『人並以上に努力せよ』『自分がしなくて誰がやる』『一日怠れば回復は三日』『病気は許されぬぜいたく』『けがに慣れてしまえ』—これらの格律で固められた大松イデオロギーは『根性』とそれをつくる『ハード・トレーニング』ということばで要約された．(作田, 1967, p. 270)

大松が実践した「ハードトレーニング」とは, 「自分自身に打ち勝つ日々の修練」(大松, 1963, p. 103)であり, 「そういうハードトレーニングによって, 根性が, つまり“事を行なうに久しく耐え忍ぶ精神の力をもった性質”が生まれてくる」(大松, 1963, p. 104)と述べられている．また, 根性養成のために, 強烈な継続的行動や目的への執着, その結果として人格のなかに「精神の力」が生まれる, といった条件をあげている．

大松の著書「おれについてこい!」の内容分析をおこなった山岸(1979)によれば, 大松の主張の中心テーマは, 精神力による目標達成にあり, 目標達成に向けてあらゆる手段が動員され, その副産物として人間形成および幸福がもたらされることであった^{註1)}．大松のハードトレーニングに象徴される「根性」論が受けいれられていった要因は, 次のように考えることができよう．つまり, 大松が指導した日紡貝塚女子バレーボールチームは, 国内にとどまらず世界で活躍し, 1962(昭和37)年の世界選手権で優勝したことで東京オリンピックにおけるメダルの獲得が期待されるが, それをも実現したことによって, 人びとに広く知られていったと考えることができる．

3. 東京オリンピック以降の社会における「根性論」の展開

すでに検討したように, 「根性」は, 東京オリンピックを契機として競技者の養成や強化, その成果としての勝利のための精神的基調として用い

られるようになったと考えられる。一方で、この時期に「根性」はスポーツ以外の領域でも取り上げられている。

雑誌「児童心理」では、1965(昭和40)年5月号で根性に関連する特集が組まれている。本明(1965)は、「根性」を一般社会における仕事への意欲としてとらえている。また、その意欲をもって成果を出すことで社会の期待にこたえ、社会的価値を生産していくことが「根性づくり」であると考えている。この「根性」は、教育界においては人間形成という視点から比較的長い時間経過における目標達成を目指す際の解決の一助となる点において、その必要性が認められている(本明, 1965, p. 3)。心理学者であった本明は、欲求・願望・衝動等という動機の体系の成立・発展を考え、「根性」の心理学的メカニズムを、心理学における「意志」の概念の下で説明している。

「児童心理」における同特集記事において、杉山(1965)は、「根性」がスポーツの世界に端を発し、勝利への欲求とそのための猛練習が強調されたことで、「根性」はきたえられることによって身につくものであるということが確認されていたと述べている。杉山は、「根性」論の問題性について、資本主義社会における産業界の要求に応じた人間的な資質の問題にひきよせた見解を示している。具体的には、経済審議会の人的能力部会の答申「経済発展における人的能力開発の課題と対策」(1963)において、この人間的な資質の問題が明確にされている。答申では、「ハイ・タレント」「中級技術者」「単純労働者」といった労働力の育成が目指されており、人間としての育成ではなく、労働力としてみなされる人間の効率的な養成が考えられていた。また、特に力点が置かれたハイ・タレントの育成において、「すべてが素質として先天的に備っているのではなく、後天的な経験や努力によって得られるものも多い」(経済審議会, 1963, p. 21)といわれているように、これらの資質は教育によって身につけられるものであると考えられていた。杉山が述べているように、東京オリンピックにおける「東洋の魔女」の優勝がそれに拍車をかけ、スポーツにおける

「根性」が、資本主義社会のなかで生きる原則として拡大解釈され、求められる人間像についての問題と関係をもち、教育と結びついたと考えることができよう。

東京オリンピック以降、社会に「根性」が受け入れられた背景には、漫画やテレビ、流行歌といった大衆文化において「根性」が取り上げられたことが考えられる。1966(昭和41)年5月に「週刊少年マガジン」で連載がはじまった「巨人の星」、1967(昭和42)年から「週刊少年キング」で連載された「柔道一直線」では「根性」論が展開されている。ほかにも、1968(昭和43)年から連載された「アタック No. 1」や1969(昭和44)年から連載された「サインはV!」は、大松博文と「東洋の魔女」に影響を受けた作品であると考えられる。テレビ番組でも、漫画のアニメ化で「巨人の星」が1968(昭和43)年3月から1971(昭和46)年9月まで放映され、「アタック No. 1」、「サインはV!」も同時期に放映されている。漫画やアニメでは、いわゆる「スポ根」^{註12)}というジャンルが誕生しているように、東京オリンピック後、スポーツにおける「根性」に関連した作品が流行したといえる。先の新聞記事における「根性」の使用状況を調査した際に、両紙とも1970(昭和45)年から1971(昭和46)年における件数の上昇がみられたが、これは上述の「スポ根」ジャンルの流行に関連したものと推察される。歌謡曲に関しては、美空ひばりの「柔」(1965)や水前寺清子の「ゆさぶりどっこの唄」(1965)、「いっばんどっこの唄」(1966)、村田英雄の「柔道一代」(1963)、「柔道水滸伝」(1965)、山田太郎の「新聞少年」(1965)といった流行歌の歌詞は「根性」に通じる内容を示しているといわれる(山岸ほか, 1979, pp. 232-233)。東京オリンピックを契機として、スポーツ界で展開されてきた「根性」論は、一般社会や教育、大衆文化においても取り上げられ、「困難にくじけない強い性質」「事を成し遂げようとする強い気力」としての「根性」の定着を後押ししたと考えることができよう。

本研究におけるこれまでの分析、検討をふまえ、最後に課題3)「根性」の意味使用が変容し

ていった要因についての仮説を提示したい。「根性」の意味使用が変容していく過程には、東京オリンピックを成功に導くためにスポーツ体制が整備され、「根性」が担い手の精神的基調として戦略的に措定されていたことが指摘された。このときに、スポーツにおける「根性」は競技者としての「人間づくり」や「人間形成」の問題として取り上げられ、大島の主張に示されたように、東京オリンピックを契機に新たなスポーツ界のアイデンティティを構築しようとする意図があったことが推察された。一方で、先の杉山の見解にみられたように、高度経済成長を成し遂げるために、社会における人間的な資質の問題が取り上げられ、労働力としてみなされる人間の効率的な養成が考えられていた。すなわち、スポーツ界と経済界および実生活において、国際競争に勝利し、目標を達成するための「人間づくり」「人間形成」を問題としていたといえる。これには、先の作田が述べているように、実生活においてもスポーツにおいても「成功の方法はどちらの世界でも同じだという考え方」（作田，1967，p. 271）がなされていたといえよう。それゆえに、「根性」という言葉を採用した戦略的意図がそれぞれの発信主体の側で一致していたと考えることができよう。

また、作田の見解をふまえれば、もうひとつの考え方として、実生活における（集団の）実力はスポーツにもあらわれるという「素朴な反映論」（作田，1967，p. 271）があげられる。1953（昭和28）年に日紡女子バレーボール部を創設するにあたって、当時の社長の意向が以下のように記されている。

「日紡はこんど、バレーボールを会社の看板スポーツとしてやる方針を立てたのだが、やるからには、絶対に強いチーム、負けないチームにせにゃならん。その強弱によって社運が判断される。どんどん強くなっていけば、世間から、日紡の社運は隆盛とみなされ、弱ければ、衰退の一路をたどっているとみなされる」（大松，1963，pp. 34-35）

上述のように、当時の企業体の実力は、スポーツの実力で評価されうるものとしてみなされていたといえよう。経営に余裕のある企業だからこそ、スポーツに力を入れることができると考えられたのであり、実際に日紡バレーボールチームの歴史を引き継いだユニチカバレーボール部は、不況の影響をうけて2000（平成12）年に休部を発表している（海老原，2000，p. 915）。

東京オリンピックにおける「東洋の魔女」をはじめとした競技者の活躍・勝利によって、スポーツにおける「根性」論が、当時の時代状況を生き抜くための原則として拡大解釈され、高度経済成長期に求められる人間像についての問題と関係をもったことが推察される。敗戦による挫折・喪失を経験し、困難に耐えて復興を果たし、国際競争を勝ち抜いていく姿を、スポーツが競技者の身体（勝利）を通じて示したといえよう。そして「新しい人間的資質」が1960年代の社会に求められたことで、「生まれついた人間の根本的な本質」というそれまでの「根性」という言葉の意味使用もまた、「困難に耐え抜く強い意志」、さらにはそれが後天的に形成されうるという意味使用へと必然的に変容していかなければならなかったと考えることができよう。

Ⅳ．本研究のまとめ

本研究は、1960年代のわが国における「根性」の意味使用が変容した契機を明らかにすることを目的としていた。本研究におけるこれまでの考察の結果、以下のようにまとめることができる。

戦前から戦後のはじめにかけて「こころだて、こころね、しょうね」といった、人間性や人間の本質的な部分、先天的に備わった性質といった意味で、主に否定的な用語とともに使用されていた「根性」という言葉が、1960年代の社会状況を背景に、東京オリンピックを重要な契機として、後天的に備わる「困難にくじけない強い性質」「事を成し遂げようとする強い気力」というもうひとつの意味で、主に肯定的な文脈における使用へと転換していったことが実証的に示された。また、

東京オリンピックにおける競技者の精神的基調として養成・強化の対象とされた「根性」は、勝利という目標達成のために精神を集中し、困難に屈せず継続する強固な意志のこととされ、その養成には、ハードトレーニングといわれる猛練習が重視された。もとは先天的な人間性として用いられていた「根性」という言葉がスポーツに転用されたことで、後天的に形成されるもの・養成できるものと捉えられ、競技者としての「人間づくり」や「人間形成」の問題として、1960年代の社会における人間的な資質、人的能力の開発の問題とも関連づけられ、戦略的に推進されていったことが考えられた。以上のことから、1960年代における「根性」の意味使用の変容には、スポーツ界とりわけ東京オリンピックが重要な役割を果たしたといえよう。

注

- 注 1) 三本松 (2003) は、「スポーツの発展過程において、その国の風土、文化、国民性等が浸透していくことによって、その国独自のスポーツに対する価値観や意識、態度等が形成されるという文脈において、究極的には、わが国に特有の、あるいは固有のスポーツ観あるいはスポーツ行動様式等を明らかにする」という目的において、「日本人のスポーツ観」や「スポーツの日本的特性」を「日本的スポーツ論」に統一して用いている。
- 注 2) たとえば、本文で後述する見田 (1965) も引用しているが、「近代日本思想史講座」第 1 巻の冒頭において以下の記述が確認できる。
「経済は戦前の水準に追いつき、追い越したかもしれないが、敗戦によってくずれたわれわれの基本的な価値体系は、元にもどらなかったし、もどらぬことは当然だとしても、それに代る別の価値体系がつくられてもいない。いろいろの選択の努力はあるが、それらは有効に統一化へ向かわないで、バラバラに存在している。精神に関していえば、私たちはまだ敗戦の衝撃からいくらか回復していない」(竹内, 1959, p. 2)
- 注 3) 五十嵐 (2007) は、戦後日本の歴史を背景として、過去を想起するプロセスの検証を行なううえで、「記憶」を歴史の不可分な一部として認め、歴史という概念そのものの再検討を試みている。五十嵐は、過去を再構築しようとした多くの試み

を、戦後日本の文化的な言説空間にたどり、過去を記憶するなかで敗戦による「挫折・喪失」が中心的な位置にあることを明らかにしている。

- 注 4) 安丸によれば、「通俗道徳」は幕末から明治にかけて広汎な民衆のうちにみられた日常的な生活規範、自己規律を中心とした倫理のことである(安丸, 1974, p. 4)。「通俗道徳」が指摘されたことには、次のような歴史的状況がかかわっているといえる。すなわち、わが国における近世後期において、封建権力や商業高利貸資本による過酷な収奪を経済史的要因として荒廃する村々が続出したといわれ、家や村の没落を克服しなければならないという切迫した状況が、新たな生活態度の樹立、民衆思想の形成という課題に直面させたと考えられる。
- 注 5) 中井 (1982) は、精神病理学の視点から日本人の勤勉・工夫を支えている性格構造とその歴史的背景について考察を行なっている。中井は、うつ病好発性格として承認されている下田光造の「執着気質」やテレンバッハの「メランコリー型」の特徴記載に、広範囲の職能者の仕事への関わり方、職場の人間関係が共通してあげられていることを指摘する。そのなかで、中井は昭和前期に精神科医として活動した下田光造が「執着気質者」について記載した内容に、安丸の「通俗道徳」に共通する生活倫理・生活道徳をみいだしている。中井は、この生活倫理・生活道徳を「執着(性)気質的職業倫理」とよんでいる(中井, 1982, pp. 43-44)。安丸 (1996) もまた、中井の「執着(性)気質的職業倫理」が通俗道徳にほぼ照応するものであることを認めている(安丸, 1996, p. 94)。
- 注 6) 国語辞典の内容については、以下の辞典にあたり、内容の検討を行なった。なお、本文中で引用した辞典の記載内容は原文のまま示している。(発刊年順)
「言海」(1891)、「日本大辞林」(1894)、「辞林」(1907)、「大日本国語辞典」(1928)、「大言海」(1933)、「広辞林」(1934)、「辞苑」(1935)、「言苑」(1938)、「言林」(1949)、「広辞苑」(1955)、「新言海」(1959)、「広辞苑(第2版)」(1969)、「日本国語大辞典」(1974)、「広辞苑(第3版)」(1983)、「日本国語大辞典(第2版)」(2001)、「広辞苑(第6版)」(2008)
- 注 7) 日本国語大辞典第2版(2001)の「語誌」によれば、「根性」は本来仏教語であり、好悪のいずれの印象も伴わない言葉であったが、次第に悪い

意味を伴ったかたちで用いられ、それが現代にまで続いているといわれている。その一方で、スポーツや教育との関わりにおいて、悪い「根性」を鍛え直すという観点がおこり、鍛えられた「根性」から、「根性」自体が好ましい意味で用いられることとなったと説明されている（ジャパンナレッジプラス「日本国語大辞典」<http://www.jkn21.com/body/display/>）。

- 注 8) 新聞記事検索については、以下の朝日新聞と読売新聞のオンラインデータベースを使用した（キーワードは「根性」を入力した）。また、検索範囲は国語辞典の内容との照応を考慮に入れ、明治期の両紙の創刊から昭和期まで（1870年代から1980年まで）とした。

朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」

<http://database.asahi.com/library2/>

検索結果：345件（1879年—1980年）

読売新聞「ヨミダス歴史館」

<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

検索結果：608件（1875年—1980年）

- 注 9) 新聞記事における「根性」の意味使用の転換は1960年代はじめ頃であったのに対して、辞書の記載において変化が確認されたのは1970年代はじめ頃であった。この時間的差異については、「根性」の意味使用の転換が確認され、辞書に採録されるまでには一定のタイムラグが生じていたと推察された。

- 注10) 1964(昭和39)年5月23日の選手強化本部総会における組織編成の承認時点での心理部会は下記の人員で構成された。（スポーツ科学研究委員会，1965，p. 22）

スポーツ科学研究委員会（心理部会）

松井三雄，松田岩男，清原健司，大川信明，小笠原慈英，成瀬悟策，瀬谷正敏，藤田厚，小林晃夫，太田哲男

- 注11) 山岸（1979）は、内容分析を適用することによって、価値や態度コンプレックス一般の分析のための方法の開発を試みており、「根性主義」はその適用例として位置づけられている。検討の結果として、以下の点が「根性主義」の性質として述べられている。

「(1)目標を達成するためには、禁欲すなわち己に克つことが最も大切であり、次に努力と精神力が大切である。忍耐、持続力、自己犠牲の精神、義務の遂行なども目標達成のために必要であるが、先の三つほど重要ではない。

(2)努力し、苦勞すれば、幸福になることができ

る。また幸福を得るためには、強い精神力も必要である。

(3)持続性、つまり同じことを繰り返す行なうことにより、また自己犠牲の精神を発揮することにより、人間形成がなされる」（山岸，1979，p. 193）

- 注12) 「スポ根」は、スポーツ漫画の一ジャンルとして、「スポーツ＝熱血＝根性＝友情＝努力＝青春ドラマ＝少年漫画」（夏目，1991，p. 50）という図式で捉えられている。このジャンルは、努力や忍耐でスポーツに取り組み、困難を乗り越えて選手としてのパフォーマンスの向上へ前進し続ける過程を中心に描かれた作品をさすといえる。本文でも述べているように、「スポ根」は1960年代から70年代に隆盛した劇画の影響を受けて流行したことが考えられる。

文 献

- 朝日新聞（1879）5月30日付 朝刊。
 朝日新聞（1893）9月8日付 朝刊。
 朝日新聞（1894）2月11日付 朝刊。
 朝日新聞（1910）4月19日付 朝刊。
 朝日新聞（1915）1月24日付 朝刊。
 朝日新聞（1915）10月12日付 朝刊。
 朝日新聞（1960）5月11日付 朝刊。
 朝日新聞（1960）11月13日付 朝刊。
 朝日新聞（1961）11月1日付 夕刊。
 朝日新聞（1964）10月15日付 朝刊。
 朝日新聞（1964）10月22日付 朝刊。
 朝日新聞（1965）10月22日付 夕刊。
 朝日新聞（1966）8月5日付 夕刊。
 浅川正一（1968）体育の学習と精神力。学校体育，21（6）：22-25。
 大松博文（1963）おれについてこい！。講談社：東京。
 デビットノッター・竹内 洋（2001）スポーツ・エリート・ハビトゥス。杉本厚夫編 体育教育を学ぶ人のために。世界思想社：京都，pp. 4-23。
 海老原 修（2000）高度経済成長を支えた呪術：大松博文とその論理。体育の科学，50（11）：913-917。
 五十嵐恵邦（2007）敗戦の記憶：身体・文化・物語 1945-1970。中央公論新社：東京。
 金沢庄三郎編（1907）辞林。三省堂書店：東京。
 金沢庄三郎編（1934）広辞林。三省堂：東京。
 経済審議会編（1963）経済発展における人的能力開発の課題と対策 戦後教育改革構想Ⅰ期8。日本図書センター：東京。
 岸野雄三（1968）日本のスポーツと日本人のスポーツ観。体育の科学，18（1）：12-15。

- 松田岩男 (1971) 根性の心理. 体育の科学, 21(9): 572-574.
- 見田宗介 (1965) 現代日本の精神構造. 弘文堂: 東京.
- 物集高見 (1894) 日本大辞林. 清水卯三郎: 東京.
- 本明 寛 (1965) 根性の心理学. 児童心理, 19(5): 1-14.
- 中込四郎 (1984) スポーツにおける精神力の分析: 根性を考える. 体育の科学, 34(2): 84-88.
- 中井久夫 (1982) 執着気質の歴史的背景: 再建の倫理としての勤勉と工夫. 分裂病と人類. 東京大学出版会: 東京, pp. 39-87.
- 夏目房之介 (1991) 消えた魔球 熱血スポーツ漫画はいかにして燃えつきたか. 双葉社: 東京.
- 日本大辞典刊行会編 (1974) 日本国語大辞典 第8巻. 小学館: 東京.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001) 日本国語大辞典第2版 第5巻. 小学館: 東京.
- 大島鎌吉・東海林武雄 (1964) 秒読みに入った民族の祭典 (対談) 特集・技能五輪の成果と今後の課題. 経営者, 18(10): 64-69.
- 太田哲男 (1968) スポーツと根性. 体育科教育, 16(6): 44-45.
- 大槻文彦 (1891) 言海. 大槻文彦: 東京.
- 大槻文彦 (1933) 大言海 (第2巻). 富山房: 東京.
- 大槻文彦 (1959) 新言海. 日本書院: 東京.
- 坂上康博 (2001) にっぽん野球の系譜学. 青弓社: 東京.
- 作田啓一 (1967) バレーボールの中の共同体. 恥の文化再考. 筑摩書房: 東京, pp. 268-279.
- 三本松正敏 (2003) 日本のスポーツ論再考. 福岡教育大学紀要52第5分冊: 51-64.
- 新村出編 (1935) 辞苑. 博文館: 東京.
- 新村出編 (1938) 言苑. 博文館: 東京.
- 新村出編 (1949) 言林. 昭和24年版. 全国書房: 京都.
- 新村出編 (1955) 広辞苑. 岩波書店: 東京.
- 新村出編 (1969) 広辞苑 (第2版). 岩波書店: 東京.
- 新村出編 (1983) 広辞苑 (第3版). 岩波書店: 東京.
- 新村出編 (2008) 広辞苑 (第6版). 岩波書店: 東京.
- 菅原 禮 (1976) 日本のスポーツ風土の社会学的考察. 新体育, 46(4): 22-25.
- 杉山明男 (1965) 根性論と現代社会—根性論を必要とする社会的背景—. 児童心理, 19(5): 15-23.
- スポーツ科学研究委員会編 (1965) 東京オリンピックスポーツ科学研究報告.
- 高橋亀吉 (1964) スポーツと根性について. 新体育, 34(11): 130-135.
- 竹内 好 (1959) 講座をはじめに当って. 家永三郎編 近代日本思想史講座 1 歴史的概観. 筑摩書房: 東京, pp. 1-12.
- 丹下保夫 (1963) 体育技術と運動文化. 大修館書店: 東京.
- 東京オリンピック選手強化対策本部 (1962) いわゆる「根性」について (座談会). OLYMPIA. 3(3): 2-10.
- 上田万年・松井簡治 (1928) 大日本国語辞典 第2巻. 富山房: 東京.
- 上杉正幸 (1982) 日本人のスポーツ価値意識と道・修行の思想. 体育・スポーツ社会学研究, 1: 39-57.
- 山岸俊男 (1979) 根性主義—「おれについてこい!」の内容分析—. 一橋論叢, 81(2): 181-197.
- 山岸俊男・市川孝一・島田幸男 (1979) 高度成長期の社会心理の一側面—「根性主義」試論—. 佐藤毅ほか編 現代の社会心理. 誠信書房: 東京, pp. 231-249.
- 安丸良夫 (1974) 日本の近代化と民衆思想. 青木書店: 東京.
- 安丸良夫 (1996) 〈方法〉としての思想史. 校倉書房: 東京.
- 読売新聞 (1875) 8月10日付 朝刊.
- 読売新聞 (1928) 6月16日付 朝刊.
- 読売新聞 (1961) 10月16日付 朝刊.
- 読売新聞 (1961) 11月10日付 朝刊.
- 読売新聞 (1961) 11月14日付 朝刊.
- 読売新聞 (1964) 8月10日付 朝刊.
- 読売新聞 (1964) 10月23日付 朝刊.
- 読売新聞 (1965) 2月1日付 夕刊.
- 読売新聞 (1965) 3月3日付 朝刊. (HP)
- 朝日新聞 (「聞蔵Ⅱビジュアル」) <http://database.asahi.com/library2/> (参照日2012年5月16日)
- 読売新聞 (「ヨミダス歴史館」) <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/> (参照日2012年5月16日)
- 知識探索サイト ジャパンナレッジプラス Japan knowledge+ <http://www.jkn21.com/stdsearch/displaymain> (参照日2012年5月16日)

(平成23年2月7日受付)
(平成24年2月16日受理)